

## 金言:アジア市民、連帯の輪=西川恵

毎日新聞 2013年02月08日 東京朝刊

<k i n-g o n>

中国海軍のフリゲート艦が海上自衛隊の護衛艦に火器管制レーダーを照射した問題がニュースをにぎわせた6日、東京の国際文化会館で「アジアの市民社会-今、これから」と題したシンポジウムが開かれた。アジア各国から参加した登壇者たちの「国境を超えた市民社会の連帯を作ろう」という発言を聞きながら、リスクと新しい胎動が同居するアジアの現状に感慨を覚えずにはいられなかった。

この種の会合は珍しいものではない。しかしこのシンポジウムが1996年から続くプログラムの一環で開かれたと知ると話は別だ。

国際交流基金と国際文化会館は毎年、アジア各国の多様な分野のオピニオンリーダー6、7人を2カ月間、日本に招いている。一行は寝食を共にしながら日本各界の専門家と議論し、各地を訪ねて地域の人たちと交流する。昨年は震災の被災地と沖縄を訪れた。日本滞在の最後は各人が活動成果を発表し、公開シンポジウムで成果を披露する。

アジアに人のネットワークを作り、新しいアジア創造のプラットフォームを目指すこのユニークなプログラムは、96年から昨年まで16年間の参加者は延べ100人に上る。今回、この中から12人が招かれ、アジアの市民社会の連帯とあるべき姿について議論した。

女性の人権問題に取り組むパキスタンの女性活動家は「アジアではまだ市民社会はつながっていない」と、人のつながりを面として広げていくことの必要性に触れた。マレーシアの研究所の元女性副所長は「3・11では我々はテレビにくぎづけになり、日本人の苦難に涙し、また感動した。アジアの人々は支援を惜しまなかったが、あれは市民社会のつながりが垣間見えた」と述べた。

アジアに市民社会の連帯を作っていくことは、ある意味、国家の論理とは別のところで国に横串を刺していくことである。発展するアジア各国はさまざまな共通の課題に直面している。都市問題、公害・環境、人権問題……。中国から参加した雲南民族大学の教授は、雲南の伝統的な儀式が観光開発の中でショーの見せ物として陳腐化している現状を指摘したが、これも中国だけの問題ではない。

こうしたテーマで国々に横串を刺し、専門家や非政府組織（NGO）の国境を超えたネットワークを作っていくことは市民社会の連帯を育てていく力になる。これはまた情報回路を多様化し、さまざまな意見を知らしめる。一朝一夕の話ではないが、新しいアジアはこうしたところから地道に作っていくしかない。（専門編集委員）